

経済学がもっと面白くなる〈情報&メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報

【エコノ】

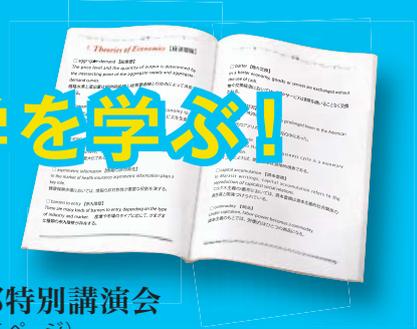
2014.冬・春号

econ.

No. 29

経済学英語語彙集が完成

特集 **英語で経済学を学ぶ!**



news 1 経ゼミ協プレゼン大会
越後修先生 (4 ページ)

news 2 経済学部特別講演会
野口剛先生 (6 ページ)

news 3 経済学会主催特別講演会
小坂直人先生 (8 ページ)

news 3 労働経済論公開授業
川村雅則先生 (8 ページ)

news 2 基礎ゼミ貿易ゲーム
神山義治先生 (6 ページ)

column From a Distance
栗林広明先生 (8 ページ)

news 2 地域研修報告会
浅妻裕先生 (6 ページ)

特集 英語で経済学を学ぶ
松本広幸先生 (2 ページ)
山田誠治先生 (2 ページ)

interview OG 訪問—働きウーマン⑫屋木志都子さん (7 ページ)

連載企画 研究室の窓から
宮入隆先生 (5 ページ)

ECON BAND

経済学部報「econ.No.29」の発行にあたり、記事の原稿執筆にご尽力いただいた先生がた。経済学部をより良い学部にするべく、バンドのごとく一丸となって、日々活動されています。

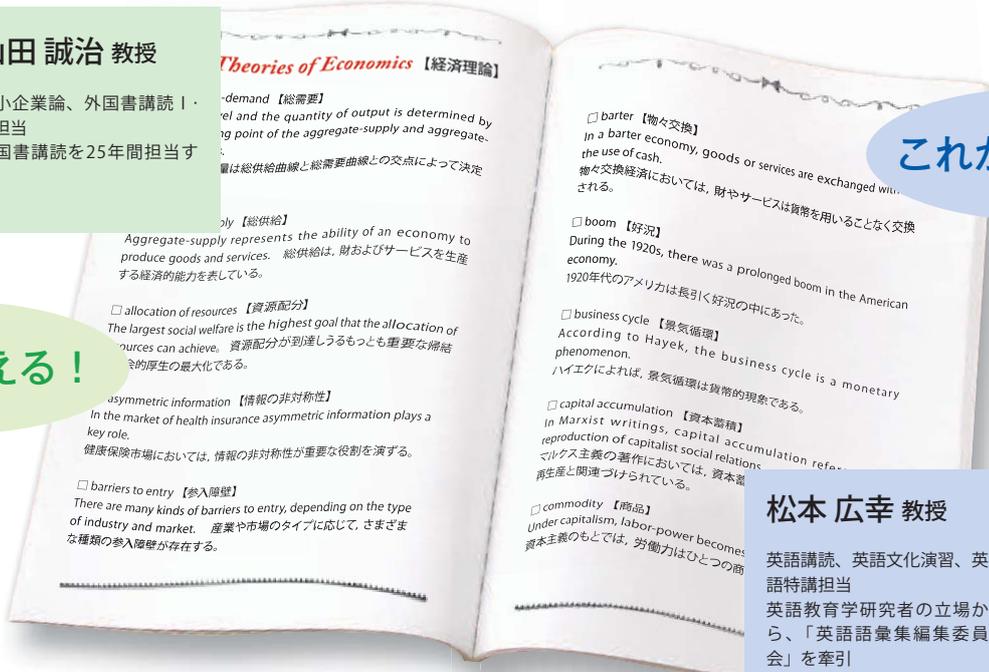
特集 英語で経済学を学ぶ!

様々な分野でグローバル化が問題にされ、経済学においても、学問領域の基盤をなす実体経済そのものが全地球規模に共有されています。まさに経済学そのものがグローバルな学問ともいえます。本学部では専門ゼミのほかに「外国書講読（以下、外書）」という授業も開講されています。外国語によって、経済をより広い視野で学んで行こうというものです。この学習をサポートする経済学の用語集「英語で学ぶ経済学のことば Studying Economics through English: Essential Themes and Terms」が制作されることになりました。発行に際し、その構想と目的、内容・構成や利用方法について、また用語集の活用から経済学部生に期待することを、本学部の山田誠治先生と松本広幸先生にうかがいました。



山田 誠治 教授

中小企業論、外国書講読Ⅰ・Ⅱ担当
外国書講読を25年間担当する



これが用語集だ!
見本

これは使える!



松本 広幸 教授

英語講読、英語文化演習、英語特講担当
英語教育学研究者の立場から、「英語語彙集編集委員会」を牽引



英語語彙集とは何か

山田：まず「英語で学ぶ経済学のことば」とはどのようなものですか。

松本：経済学関係の分野の英語表現をコンパクトにまとめた用語集です。この制作をいま進めています。その目的と構想ですが、一般英語は皆さんこれまで学んできたと思うのですが、経済学関係の専門的な英語については一般英語の中では出てこないものがあります。そういう重要語句だとか表現を効率的に学んでもらう、言い換えれば、少しでも楽をして学んでもらいたいということです。そういうことから「英語語彙集編集委員会」というのを今年度立ち上げて、この編集に携わっております。要するに、英語学習をもうちょっと進めて、経済学を英語で学んでもらおうと、そういう企画です。内容と構成は別表の通りです。(右の表1～3参照)

次に利用方法ですが、これが一番大切です。現在詳細は検討中ですが、いくつかの柱は考えています。ひとつは、もちろん**自学自習用**です。こういう用語集の利用というのは、基本的には個人の努力によって行

われるものですので、自学自習教材として使ってもらいたいと思います。意欲の高い学生にとっては、自学自習をするのが効果的な利用法だと思います。二つ目の柱は、英語の授業です。少しレベルが高い部分もありますが、**英語授業の中で活用**することは十分可能だと思います。三つ目はですね、経済学部でのゼミや専門科目の**外書**での活用を考えています。これは「経済学を英語で学ぶ」という企画なので、ゼミ等の専門科目の中で、一部あるいは関連づけての利用が可能かと思えます。つまり、さまざまな場面でくり返し学習することで、出てくる語彙の定着を図るとともに、経済学関係の学習を促す、理解を深めるといった意味合いがあります。さらにプラスアルファもあります。日本ではTOEICが英語の資格として人気がありますが、この用語集にはビジネス関係の語彙が多く含まれているので、学習を進めることで**TOEICの受験対策**にもなります。作って終わりではなくて、編集委員会としては今後いろんな場面で活用して頂ければと考えています。今はCALL教室やコンピュータ室などでGlexaというプログラムがありますが、将

来的にはその中に組み込んで、eラーニング教材として活用するというのも選択肢のひとつです。

山田：少し質問をさせて下さい。最初に、この語彙集編集委員会を結成して、こういうものを作ろうと思ったきっかけと、それ

1/経済学+経済学に関連する10のテーマ

- ・分野毎に必要な英語表現を学習できるように、以下の10テーマで構成。
- 最初からでなくても、興味のあるところから始めることができる。
- 1. 経済理論
- 2. 経済学史・思想
- 3. 経済・産業史
- 4. 産業・ビジネス
- 5. 環境・資源・エネルギー
- 6. 政治経済
- 7. 開発経済
- 8. 金融
- 9. 財政
- 10. 労働・福祉

1. Theories of Economics 【経済理論】

□ aggregate-demand 総需要

The price level and the quantity of output is determined by the intersecting point of the aggregate-supply and aggregate-demand curves.

価格水準と産出量は総供給曲線と総需要曲線との交点によって決定される。

□ aggregate-supply 総供給

Aggregate-supply represents the ability of an economy to produce goods and services.

総供給は、財およびサービスを生産する経済的能力を表している。

□ allocation of resources 資源配分

The largest social welfare is the highest goal that the allocation of resources can achieve.

資源配分が到達しうるもっとも重要な帰結は社会的厚生を最大化である。

□ asymmetric information 情報の非対称性

In the market of health insurance asymmetric information plays a key role.

健康保険市場においては、情報の非対称性が重要な役割を演ずる。

□ barriers to entry 参入障壁

There are many kinds of barriers to entry, depending on the type of industry and market.

産業界や市場のタイプに応じて、さまざまな種類の参入障壁が存在する。

□ barter 物々交換

In a barter economy, goods or services are exchanged without the use of cash.

物々交換経済においては、財やサービスは貨幣を用いることなく交換される。

□ boom 好況

During the 1920s, there was a prolonged boom in the American economy.

1920年代のアメリカは長引く好況の中にあった。

□ business cycle 景気循環

According to Hayek, the business cycle is a monetary phenomenon.

ハイエクによれば、景気循環は貨幣的現象である。

□ capital accumulation 資本蓄積

In Marxist writings, capital accumulation refers to the reproduction of capitalist social relations.

マルクス主義の著作においては、資本蓄積は資本主義的社会関係の再生産と関連づけられている。

□ commodity 商品

Under capitalism, labor-power becomes a commodity.

資本主義のもとでは、労働力はひとつの商品になる。

と絡めて本学の学生の英語教育とか英語の到達点あたりで何か思うことがあったと思われるので、その辺を聞かせてもらえますか。

松本：構想・目的でもお話ししましたが、先程言ったように少しだけ楽をして学んでもらいたいからです。経済学部ではちょっと英語が苦手な学生が多いようにも思います。そういう学生が一般英語もそうですけれども、専門の経済学にかかわる英語を少しでも気軽に学ぶきっかけになってほしい、ということで企画しました。問題は学生の皆さんにそういうふうに活用してもらえるかということですね。

山田：本学部の教育学習開発委員会でも、この活用法とかを一緒に考えてみるのも良いかも知れないですね。

松本：そうですね。語彙集編集委員会で今回考えましたが、学部全体で活用を考えていきたいですね。

山田：英語教育の位置づけと、経済学を英語で学ぶということは微妙にスタンスが違うので、共通科目としての英語と専門の英語の関係とか区別というのは、実は学部でも議論になったことがあります。つまり、一般的な英語力を高めることと、経済学を英語で学ぶというのはちょっとテーマ的には違うところもあると思います。

ESP—特別な目的のための英語学習

松本：英語教育の中でも、一般的な英語にプラスしてESP (English for Specific Purpose) というのがあります。要するに、例えば観光学でしたら、その観光学に関係するような専門的英語表現を学んでいくという流れがあります。ですから今回の「英語で学ぶ経済学のことば」という企画は、英語教育では「ESP—特別な目的のための英語学習」というように位置づけられます。

山田：なるほど、そういう位置づけだったら、経済学に触れるような英文を通して、経済学の面白さというか、興味を持ってもらえるような展開が考えられますね。これを活用する形で英語のボキャブラリー・専門用語から経済学に親近感を持つようになる。英語から経済学を学べるということに意義がありますね。英語の経済学関係の文献というのは、日本語文献以上にインターネットなどで手に入りやすく、英語は日常的なものになってきています。経済学を学ぶうえでも、特に外書という英語を読む授業でなくても、テキストやデータ、情報なりを英語で理解することが講義やゼミでも求められています。その割には、ちょっと英語力が弱いのかな。これをどうすればいいのか悩ましいところです。

25年間の外書授業を通して

山田：私は平成元年に本学に赴任して、実

2/コロケーション (collocation/連語) 形式

- 見出し語 (単語) をできるだけ単独ではなく、コロケーション/連語で提示。

いわゆる連語形式で、単独で覚えるよりは2~5語くらいまとめて覚え、記憶効率を高める。

この形式が学習に有効であるということが研究成果として出ている。なるべくそういうコロケーション形式で提示する。

- allocation of resources
- asymmetric information
- barriers to entry

<上の内容見本を参照>

3/経済学関係の定義や説明中心の例文

- 見出し語を含む英語例文は、あまり長くないように、1~3行程度で経済学関係の定義や説明を表記。

例文を日本語訳とともに学習することで、英語学習はもちろん経済学の勉強にもなるように構成。

*例えば 1.経済理論の“allocation of resources”=「資源配分」、4.産業・ビジネスの“affiliated company”=「関連会社」、5.資源・環境・エネルギーの“air pollution”=「大気汚染」、というような見出し語をつけて、例文と訳をその後配置する。

<上の内容見本を参照>

は25年間ずっと途切れなく外書をやっているんです。アメリカの産業研究をしているので、外書はあえて自分から続けている授業ですが、もっと学生の英語力も強化したい。以前は英語を通してアメリカのことを知りたいという学生が結構多かったのですが、それが減ってきているのが気になります。

今回の冊子は、英語からも経済学の学習が面白いということを知ってもらい、ひとつのツールとして活用できるんじゃないかと思っています。ESPという考え方もそうですね。以前から英語力全般を高めるような方法を模索してきましたが、先ほども観光という例が出たように、アジアも含めどこに行っても英語が共通語のようにになっているのに現状が心配というか、危機感があります。外書は英語の勉強をする授業じゃなく、アメリカのことを英語で勉強するんだと学生に言ってきましたが、英語力をつけるための教育方法も含めてやっていかないといけないですね。そういった意味でも、ボキャブラリーを通して文章理解とか、その言葉話す人たちを知るとか、社会について理解するとか、そういうことのきっかけに使えればと思います。外書の学生の中には、短期留学するとワーキングホリデーに出るとか、そういう学生が10年前は必ず一人か二人いたんです。英語を通してアメリカに興味を持ち、映画を観たりしながらそういう気持ちを高め、それで自分で

も行ってみようかという学生です。最近はその辺が少し消極的になっているような印象です。これからさらに外国との交流が進むだろうということを考えると、英語も含めいろんな意味で力をつけなきゃならないというのは、今どきの学生の課題だと思います。これまでの経験からですが、学生には英語を含む総合力を身につけて卒業させてやりたいと、少しでもね。そのために今回の冊子を活かしたいですね。

松本：学生にこういう力がつけばいい、そうすると本人たちの将来に役立つ武器になるんじゃないかという教員の思いと、学生が実際に思ったりやっていることにちょっとギャップがあるような感じがしています。本当はやらなければいけないと思っているのに、苦手で後回しにしているとか。

山田：ここ数年、外書履修希望者は一桁で、多くの学生は外書の授業を取りません。学生がこちらにもっと近寄って来るような内容でやらなければいけませんね。英語力をつけたくないのか、喋りたくないか、もっとそういうことをわかりたくないのかと言うんですが…。英語力をつけたいという、やる気を引き出すような工夫をしていく必要があるのだと思います。その意味では、今回のテキストが専門科目で使われて、学生からどんな反応が出るか楽しみです。勉強というのはやってみると面白いんだというのを感じるの、すごく時間がかかる。でもきっかけができれば、もっとこうやっ

てみたいという学生も出てくるのではないのでしょうか。外国語の文献を読んでなるほどと向こうの文化が理解でき、会話でも通じたらああ通じたとかね、そういう体験的なものも含めて動機づけの仕組みには工夫がいるのかなと思います。

松本：外国語の学習では、動機づけというのは、実は最も大切なものと言われていています。ただ大切なのはわかっているけど、実際にどう動機づけていくかということに関しては個人差があって、なかなかすべての学生に同じように当てはまりません。これは非常に大きな課題ですね。英語教育の分野では、今言いましたように、個人差のある学習者をどのように動機づけるか、その動機を維持させるかは、きわめて重要な問題というように認識されています。最後になりますが、今回の企画を通じて、英語教育プラス専門教育という感じで学生さんが何らかの刺激を受けて、英語学習や経済学関連の勉強に向かって行ってくれればいいなと思っております。



econ.News 1

[平成 25 年 11 月 18 日] 1 部ゼミナール / 経済学部ゼミナール協議会主催

プレゼン大会開催される

11月16日(土)、今やソフトボール大会と並んでゼミの恒例行事となった「経済学部プレゼン大会」が開催されました。今年で第5回目を数えるのですが、毎年プレゼンのレベルが上がってきているように感じました。上位チームには賞金が与えられるというインセンティブ・システムが効いているところが大きいのは確かでしょう。しかしそれよりも、近年の学生の能力によるところが大きいと思われます。新聞等で「若者のコミュニケーション能力不足」が指摘されていますが、プレゼン大会での彼(女)らの姿からは、その能力の高さを感じました。

とはいえ、気になった点がないわけではありません。採点者の教員には各プレゼンの後、プレゼンターへ質問をする役割が与えられていたのですが、質問することを探すのに大変苦労しました。「それは完璧なプレゼンであったことを意味するのだから、むしろ良いことではないか」との声が聞こえてきそうですが、それは違います。「事実」や「当たり前のこと」を述べるレベルにとどまっているために、質問のしようがなかったのです。言い換えれば、「自分たち独自の考え」をプレゼンするレベルには至っていませんでした。

地域研修報告会など、ゼミ学習の成果を発表する機会は、これからもあります。今年よりも一段高いレベルの報告をする彼(女)らの姿が見られるよう、指導してゆきたいと思っています。[越後]





研究室の窓から

—青果物を中心とする農産物流通の再編や産地形成による地域農業振興の課題を明らかにする—

宮入 隆 経済学部准教授
みやいり たかし

[専門は農業経済学、農産物流通論]

●主な論文に、「ボトムアップ型地域農業振興システムの構築を目指した取り組み—津別町の事例—」(北海道農業経済学会『フロンティア農業経済研究』第15巻第1号、18~26項、2010年2月、単著)

農業経済学と地域農業

「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け。」初めて聞くという方も多いかもかもしれませんが、これは日本における近代農学の先駆者であり、東京農業大学の初代学長を務めた横井時敬の語録として有名です。机上の学問ではなく、現場の声に耳を傾け、そこで直面している問題の解決に当たっていく、そんな実学としての農学をよく表している名言だと思います。

私自身もそのような実証研究を重視する農業経済学という環境のなかで、研究者になることを志してきました。研究内容を要約すれば、青果物を中心とする農産物流通の再編や産地形成による地域農業振興の課題を明らかにすることとなります。事例対象とする農協など生産者組織、個別農業者はもとより、卸売市場やスーパーなど流通に関わる企業に出向き、広範な聞き取り調査やデータ収集を行い、実態把握を進めていきます。



フィールドワークで

ラズベリーの産地づくりに携わって

ここ数年は、ラズベリーなど小果樹類の生産振興に関する研究をしています。ラズベリーはまだ日本ではあまり馴染みがない果実かもしれませんが、国内でも野山に自生しており、キイチゴと呼ばれたりしています。子供のころに食べたという年代の方もいらっしゃるかもしれません。欧米では洋菓子のほか、家庭でジャムなどに加工されて日常的に食されている主要な果実の一つです。そのため品種改良も盛んで、多種

多様な品種が生み出されています。ちなみに、欧米では果実の一人当たりの消費量が日本の倍くらいあると言われています。日本では果実は生のまま食べるのが多く、欧米では家庭においても加工調理されて食されることが多いという消費文化の違いが、こんなところにも現れます。

冷涼な気候を好むラズベリーなど小果樹類は東北地域や北海道での栽培に適しています。北海道では近年、ハスカップが特産果樹として注目されていますが、これも小果樹類の仲間です。最近ではスーパーでもブルーベリーが生果実で売られているのを見かけるようになりましたが、ラズベリー、カシス、レッドカーランツ(赤フサスグリ)なども、洋菓子やジャム、ジュース、料理の飾りなどで使用されるようになり、国内でも需要が拡大しています。アントシアニンやビタミンの含有量が多く機能性に優れている点も、健康食ブームなどを背景に、これらが注目されている要因です。

しかし、国内では未だ産地といえる規模で生産されてはならず、需要の拡大に応えるため輸入品が供給されています。とくにラズベリーの生鮮果実は年間を通じて空輸で日本に輸入されており、高単価が維持されています。このような需要があるということは、供給側にとってチャンスとなります。栽培面でも、リンゴなどの大果樹と比べ栽培管理が容易で、すぐに収穫ができ、また、果実が軽量なことから高齢化した生産者も取り組みやすいという利点があります。現在、日本農業は高齢化による担い手不足や厳しい国際競争に晒されることにより、生産の維持・拡大に困難を抱えているとともに、他方で需要の拡大が期待できる品目も限られています。そういった中で、ラズベリーのように新規需要が期待できる品目が、地域農業の活性化のための突破口の一つとなると考えられるのです。

昨年4月に北海学園大学に着任するまで、私は秋田県立大学におり、そこで大学と地域の連携事業としてラズベリーの産地づくり・特産品開発に携わりました。



秋田で栽培されているラズベリー

今までは、すでに成功した産地を対象として調査研究を行ってきたのですが、ここで求められたのは、農業者や実需者の方々と協力しながら、市場調査や組織化に取り組み、まさに実践的に産地を作っていくことでした。ラズベリーはニッチな品目であるため、生産・流通状況に関する統計資料や文献もほとんど存在しない状態です。そのため、手探り状態で首都圏の流通業者などに調査し、状況把握に努めました。また、農業者の方々と販路を求め加工業者を訪問することもありましたが、規格基準や単価の設定、パッケージ開発など新規品目の販路開拓に伴う困難性も肌で実感することとなりました。

他方で、産学連携という枠組みだけではなく、園芸学など異分野の研究者とも協力して、栽培技術の普及による生産振興に取り組みました。先の見えにくい地域農業の複雑な課題に取り組むには、すでに一点突破というわけにはいかない時代です。技術的側面から社会経済的な面まで、地域の実情を踏まえながら、異分野間で連携しながら実践的に関与していくことが、いま大学や研究者に求められていることを実感する機会ともなりました。

このような秋田での実践を踏まえ、新規品目導入による産地形成プロセスの今日的課題を明らかにすることが今後の研究課題の一つとなりますが、それだけではなく、今度は北海道で、様々な人々を巻き込みながら、地域農業を元気にする実践的な取り組みができたらと思っています。

[平成 25 年 12 月] 1部・2部基礎ゼミナール

「貿易ゲーム」を開催

経済学部では、初年次教育の組織的な実践の一環として、基礎ゼミナールを対象にした「貿易ゲーム」を12月に開催しました。昨年度はじめて導入した試みですが、その経験をふまえて今回はいっそう改善された授業が実施されました。第1回目は、世界経済における格差がどのように問題であり、なぜそれが発生するのか、全体の事前レクチャーを行い、第2回目に実際にゲームを実施しました。ゲーム後に各チームに感想を発表してもらい、このゲームの設定や進行が現実世界の何を表現しているのか、考え、まとめと振り返りを行いました。

各ゼミ選出の実行委員が「市場」などの役割を担いながら、各ゼミはチームに分かれて、架空の諸国民を演じ、生産、交換（売買・流通）、蓄積（成長）など世界経済の基本的要素を仮想的に体験しました。学生たちはゲームを楽しみながら、国際的な生産と交換、現代のグローバル化の問題、人間開発における不平等解消の重要性、問題解決に向けた国際協調のあり方などのテーマについて考え、理解していくきっかけが与えられました。地球上の資源の分割や、資本蓄積の格差、規格の独占、「自由」貿易を通じた南北問題の発生・深化、それを解決するためのNGOや国際機関による援助などが模擬体験でき、短い時間でしたが、有意義な演習が実現できました。[神山]



[平成 25 年 11 月 30 日] 1部ゼミナール

地域研修報告会が行われる

11月30日(土)、2013年度の地域研修報告会が開催されました。各ゼミの報告時間やディスカッションの時間を確保するため例年通り3教室で実施しました。報告ゼミは合計22ゼミでした。

「研修報告」という性格上、どこに行き何をしたか、という紹介にとどまってしまうがちなのですが、各ゼミ工夫を凝らして経験から導きだされた結論や課題を上手に整理してスライドを作成していました。またパソコン操作に慣れた今時の学生らしく、画像を効果的に使っているゼミもありました。報告では緊張気味の学生が多少見受けられましたが、多くが堂々としたもので事前準備をしっかりと行ってきたと感じました。全体として、3年生の報告に優れたものが多かったと思います。

今回の報告会では、報告を聞く学生の態度が良かったことが印象に残りました。熱心にメモを取る姿が目立ちました。結果として一つのゼミ報告に対して複数のゼミから質問が出る様子が度々見られ、またそれに対して「立て板に水」の如く返答する報告者もありました。

2004年に開始された地域研修報告会は今回で10回目を迎えました。各ゼミの報告内容や質疑応答が洗練されてきており、今後はより「調査研究報告会」的な意味合いを強めていくのではないかと感じました。[浅妻]



[平成 25 年 12 月 12 日] 経済学部主催財政学特別講演会

「我が国の経済・財政について」

財務省財務総合政策研究所所長の中原広氏をお招きし、「我が国の経済・財政について」というタイトルでご講演をいただきました。財務省の政策立案と執行の最前線でご活躍中のお立場から、ご講演ではまずアベノミクスとは何かを説明された後、わが国の財政と税制の現状と問題点の分析、なぜデフレが問題なのか、少子高齢化が経済や財政にどのような影響を与えるのか、などの私たちの関心があるテーマを、ご経験を踏まえながらデータに基づきやさしく解説していただきました。例えばわが国の財政については、a)恒常的な歳入・歳出のギャップ、b)公債の累増、c)年間1兆円オーダーで増加し続ける社会保障費の自然増、の3点がポイントだと指摘されました。そして公債累増と金利の関係については詳しく説明され、国債金利上昇がわが国経済や財政に多大な負の影響を与えることを強調されました。その後、少子高齢化がわが国経済と財政に与える影響を整理され、将来を担う学生に対し、1)勤勉で平均的学力の高い国民、2)経済活動の基盤となる法制度の安定性、3)財政への信認に裏付けられた低金利環境、といったわが国経済の強みをさらに発揮できるよう勉学に勤しんでほしい、という強いメッセージを残されました。ご講義を聴講した約180名の学生・大学院生・教員からは、講義で学んだ理論の政策現場での活用の方などを理解する良い機会になった、などの感想が寄せられました。[野口]





楽しいこと、
元気になること、
多くの人に発信していきたい

屋木 志都子さん
やぎ しずこ

◀ 芝居のポーズをとる屋木さん

パーソナリティで 12 年

屋木志都子さんはラジオのパーソナリティや、イベントなどの MC (番組進行役 = master of ceremonies) としてフリーランスで活躍している。また、演劇の分野にも進出し、活動の幅を広げている新進の放送ウーマンであり役者でもある。

フリーなので依頼があればさまざまな仕事に関わるが、主なホームグラウンドとして、FM ラジオ放送局の AIR-G⁺がある。屋木さんは実に 12 年間、月曜日から木曜日は「FUNFUN ファクトリー」というコーナーのレポーターとして、サポポファクトリーから生中継をしている。さらにラジオショッピングも月、金曜日と、ウィークデーは AIR-G⁺に欠かせない存在。AIR-G⁺をよく聞く人達は、一度は屋木さんの声に接していることだろう。この他に 1 時間枠の「ワンダフルミュージック」という特別番組を受け持つことがあるという。

訪ねたのはちょうどショッピング番組の放送日、慌ただしく放送の準備におわれる屋木さん「AIR-G⁺ 社員には、北海学園大学の卒業生が多いんですよ。実は学生時代に空手部の所属だったんですが、その先輩もいらっしゃいます」と、側を通る「先輩」社員の方にも気軽に声をかける。フリースタッフと AIR-G⁺ 社員がワンフロアに一体となっている「職場」に、違和感なくとけ込んでいる。「元々の気質が明るいんですが、特にお互い気持ちよく仕事出来るように挨拶など声をかけ合い、コミュニケーションを大事にしています」

どのような職業であれ、組織に属さずフリーランスで身を立て、様々なスタッフと仕事を共にして行くということは簡単なことで

はない。「AIR-G⁺」では、良い番組を作ろうという目標に向かって、皆真剣かつ楽しく仕事をしています。良い緊張感とリラックスできる空気を作っていて、声をかけやすい環境になっているんだと思います。屋木さんの根っからの明るさは、番組作りやスタッフワークにとっても活かしているようだ。それはきつとリスナーにも届いているだろう。

そのような屋木さんだが、就職活動は放送業界まっしぐらだったのか。「実は大学卒業を前にして、就職活動を全くしなかったんです。合同企業説明会に一度行き、どのような企業も自分に向いていないなーと漠然と感じました。以後、結局どの企業へも就活はしませんでした」。ゼミ担当教員だった水野邦彦教授によると「学部でも 10 番以内の成績の良い学生で、明るくもの怖じしない、印象に強く残る学生でした」と記憶に残る優秀学生だったそうだが、そういった学生に多い金融や公務員志望でもなかった。「多くの人を笑顔にできるような仕事に就くのが夢でした。それで小さな頃には、お芝居にも興味を持っていました」と言うが、高校時代はソフトテニス部、大学時代は演劇研究会にひかれたが「入部希望者はお尻出せ!」という過激な勧誘にひいてしまい、入部したのはマネージャー希望の友人に付いて行った空手部。女子はわずかでほとんどが男子。その中で男子に負けじと同じメニューで猛練習、2 年生には黒帯、4 年生では全道大学空手道選手権女子の部で優勝し、全国大会の武道館で戦ってきた勇ましい体育会経験を持っている。

アナウンサーの道へのきっかけ

結局、卒業はするものの、やりたいことが漠然としていて職業が絞れなく、特定の職に就かず試行錯誤。小さい頃からの興味に近い仕事を探し求め、タレント事務所兼イベント会社に所属することになる。転職が訪れたのは 2002 年、野外ライブイベント「GLAY EXPO」に AIR-G⁺ ブースのスタッフとして関わった事だ。AIR-G⁺ のプロデューサーやディレクターと出会い、ラジオ番組のオーディションに誘われ合格、そこから放送



▲放送中の屋木さん(AIR-G⁺)で出演した芝居で左が屋木さん▶

人のスタートとなった。「ラジオパーソナリティは夢につながる仕事だと思いました。昔から人を笑わせることや人としゃべることが好きで、クラス代表や幹事もよくやっていました。芝居に興味を持ったのもそういうところからかもしれません」。

それまでアナウンサーの勉強は特にしてこなかったこともあり、当初 3 年ほどはアナウンサー事務所に所属、その後フリーとなる。「特別な勉強はしていないけど、同じラジオパーソナリティで劇団に所属する人がいて、その人を通じて念願のお芝居に関わるようになりました。芝居は他者の話しを聞かないと成り立たない。人が聞いて面白いという、話すテクニックも芝居から身に付いてきました。東京の劇団のワークショップに参加、出演したり、どんどん芝居に引かれていっています。今年も 7 本のお芝居に出演することが決まっています」。スタジオでの放送の様子を拝見。屋木さんの語りには、からだ全体でしゃべっているような躍動感がある。芝居で身につけた身体性が活かしているのだろうか。

「最初は中々できなかったのですが、不安に思っただけでもしようがない、やりたいことはやらなきゃと、覚悟を決めてやっています。大学時代にやりたい目標が決まっていたら、もっとやれたことがあったかもしれません。特に英語は、もっと力を入れておけば良かったと思っています。でも、やりたいことはやり続ける。やらないで後悔しない」そんな気質を養ってくれたのが北海学園の環境だという。「自由な発想ができる大学だと思いますね」と締めくくってくれた。



profile
1977年 札幌市生まれ
1996年 札幌市立新川高校卒
本学経済学部 I 部経営学科入学
2000年 本学部卒
現在フリーアナウンサー、役者

【平成 25 年 11 月 29 日・12 月 13 日】1 部労働経済論公開授業

- ①これでもいいのか、学生バイト!! 大学生のアルバイトを考える
- ②若者と労働組合——ブラック企業に立ち向かうために

川村雅則准教授が担当の「労働経済論」で上記の2つの公開授業を開催した。大学生のキャンパスライフのうち少なからぬ部分をアルバイト生活が占めている。近年は学費負担の捻出が厳しくなっているという事情もあり、学生がバイトに時間をさく傾向は強まっているように思われる。

問題は、アルバイト生活におけるワークルールの軽視だ。すなわち、「定番」の(?)不払い労働にはじまり、仕事上のミスへのペナルティ、商品の買い取り・ノルマ、急な呼び出し・シフトの変更、長時間労働・残業、パワハラ・セクハラなどなどである(2013年川村ゼミ調べ)。

こうした状況の多くが法律違反であることを知らずに働いている点も問題だが、違法であると仮に知ったとしても、その是正を使用者側に求めるのはなかなか容易なことではない。そこで、「団結剣」提唱者であり、長年数多くの労働相談にのって労働組合づくりを支援してきた鈴木さんの助言を得ながら、学生バイトにおける問題状況の解決方法を考え、同時に、労働相談からみえる今日の職場状況や就職時に留意すべきことなどを学んだ。[川村]



川村ゼミ生による学生報告も行われた公開授業 [11.29]

【平成 25 年 11 月 27 日】開発研究所・経済学会主催特別講演会

「映画と地域づくり」●崔 洋一氏 [映画監督]

人生において、人は誰でも一つや二つの忘れられない映画を見た記憶があるだろう。自然を題材にしたもの、歴史や文化、あるいは、人の生き様を題材としたもの、対象はそれぞれであろう。たとえば、幼いころの私にとって、家族で見たディズニーの「砂漠は生きている」という砂漠に生息する動物たちの生態を描いた映画はあまりに鮮烈で、しばらくは脳裏から離れなかった。今回の講演で、崔監督は映画の影響力をこれとは全く別な観点から指摘していた。すなわち、人間が本来もつ自己表現要求という問題である。われわれは、ともすると日常的生活、規則やルールに縛られた生活の中で居心地良く生活できていると思っているが、実は逆に、時にはそのような枠組みを離れたいという要求を潜在的には持っており、それを解き放つことが想像力につながると監督は言う。これは青年だけではなく、お年寄りにも言える。旧穂別町のお年寄りが中心になって映画作りに取り組んだのは、まさにその具体化であったのである。この映画作りに参加するスタッフもキャストも実に生き生きとしており、映画作りが生きがい作り、地域づくりとなっている好例である。

[小坂]



崔洋一氏

From a Distance 1

「或る原点について」

●栗林 広明 [経済学科教授]

基礎ゼミの時間に、リーマン・ショックについて知っているか尋ねたら、クラスの半数以上から知らないという答えが返ってきて、こちらがショックを受けた。リーマン・ショックに至る様々な要因・過程は、同じ過ちを繰り返さないために常に振り返るべき一つの原点だろう。そのリーマン・ショックに伴う金融危機に対応したFRB議長、B・バーナンキは、大恐慌(1929年～)時の金融政策の失敗を踏まえて、今般の危機に対する対策を講じたと伝えられる。バーナンキにとっては大恐慌が問題を考えるための原点だったと言える。

さて私にとって物事を考えるときの原点は、わが国が1931年から1945年まで足かけ十五年にわたって行った戦争である。その戦争を強く意識するようになったのには幾つかのきっかけがある。祖母から米国の爆撃機による空襲の話を知っていたこともその一つである。また私が大学一年生のときに感動しながら講義を聞いた歴史学の先生が、そ

の年度限りで定年退官だったために、最後に「教養部便り」にさりげなく文章を寄せていたのだが、それを読んだことも一つのきっかけであった。その先生はいわゆる学徒出陣で徴兵されたのだが、入営直前に旧制高校時代の友人二人と会い、最後の別れをした。そして実際そのお二人は戦死し、先生自身は南方の戦地でマラリアにかかり却って命を落とさずにすんだとのことであった(マラリアは命にかかわる感染症)。そのようにして、自分と変わらない二十代前半の若者が本当に様々なことを断念して戦地に向かったことについてあれこれと考えざるを得なかった。こうしてそれ以来、政党が解体され、翼賛体制が敷かれる中、戦争に対する疑問すら口に出せなくなっていった当時のわが国の重苦しさ、日本が払った本当に多くの犠牲が、しかし結局のところ侵略と植民地権益の確保のためであったことの空しさ、等々(スペースが足りない)を肝に銘じておきたいと思うようになったのである。



サハリン 韓国系家庭の食卓 写真: ISASAKI